医挑む

第1部 寿都から

⑤学び、支え合う

IT活用し情報共有

働きたい医療機関 厚生労働省の2008年の調査で、若手医師と医学生の46％が「研修が充実している病院を勤務先に選ぶ」とし、「給与・待遇」の15％を上回った。将来的に医師不足の地域で働く場合の条件として「処遇・給与」の70％に次いで多かったのが「他に交代できる医師がいること」の57％だった。都市部でなくても、学ぶ機会を増やすとともに負担を軽減すれば、職場としての魅力がアップすると考えられている。

午前7時半、後志管内寿都町の町立寿都診療所の朝はインターネットテレビでの勉強会で始まる。ネットでつながるのは、同じ北海道家庭医療学センター（室蘭）の医師がいる道内6カ所の診療所だ。

「カナダに、初診患者が多い診療所は、住民に親しみを持たれていないという研究があります」。所長の中川貴史さん（34）が紹介した英語の論文に、十勝管内更別村の診療所の家庭医、山田康介さん（37）が「私たち6カ所の診療所でも、調べてみる価値があります」と応えた。

意識高め刺激

2月中旬、3日間の短期研修で来た大阪大6年の長野広之さん（24）も勉強会に参加、「都市から遠く離れた地域で、意識の高い医師が刺激し合う姿に驚いた。関西にもこんな診療所があればと感じた」という。

エックス線写真を見ながら患者の情報を共有する、町立寿都診療所の医師たち。新しい知識を学ぶ、研修の場でもある

若い医師が、いわゆるへき地診療を嫌うのは、最新の医療情報から取り残されるという焦りと、医師1人への負担の重さにある。

労働負担分散

寿都では、ITを活用したネットワークで情報過疎を補い、さらに医師同士の支え合いで労働負担を分散している。

町立寿都診療所の医師は、パートを含めて5人。このうち2人は研修医で、家庭医療の専門医になるべく実習中だが、勤務ローテーションに入るため、当直は1カ月7～8日に抑えられる。都市の病院勤務とほとんど変わらない頻度だ。

交代勤務を支えるため、医師同士が緊密に情報を共有する。

外来が終わった午後6時、医局に4人の常勤医が集まり、電子化されたカルテやエックス線画像のチェックを始める。患者の診療情報を共有しながら、診察に問題がなかったか検証するためだ。

カルテには、家族の不幸や子の誕生など、家庭での変化でさえ書き入れて共有し、医師のパソコンでいつでも取り出せる。どの患者がいつ受診しても、同じような診察ができる状態にするためだ。

「医師全員で、地域全体のかかりつけ医になる」。中川さんは町立寿都診療所が目指す医療をそう説明する。

医師同士の学び合い、支え合いは、寿都町民3400人の命と健康も支えている。

連載へのご感想をお寄せください。
▶Eメール iryou@hokkaido-np.co.jp
▶ファクス 011・210・5592